

横目で盗み見て後でメモだけ、そのメモは今どこにあるのか？当時(2017年頃)のポルトガルの一ヶ月の最低賃金は550ユーロ強だったから(だいたい6万6千円)、あれはきっとその月にもらうお給料だったんだろう。または、東京でミュージカル「ウエストサイドストーリー」を見た時に、何か、プエルトリコ系移民の言ったことに、ああ・・・と思ったように今思い出すけど、メモにしなかったのかメモがどこかへ行ってしまうのか。

逆に、何か重大なほどの告白を友人から聞いて、後でその内密な内容を何か有効なものであるかのようにメモしてしまった時の罪悪感。

そして、ああ、あのことを思い出したいのに・・・と思った数日後に、たまたま手に取った読みかしの本のページの間から、数年前の「その時のメモ」がぼろりと出てきたりします。

メモは残っているのではないかと感じる瞬間です。

「これで世の中は悪くなる。That's the way we found it (West Side Story)」というポストイットも、いいタイミングで飛び出してきました。——世の中は悪くなるってお前は言うけど、俺達はええ悪い世界に生まれたのさ——。しかし、その時私が何をああと思ったのかは、走り書きのメモにはないのていまいちばまりません。



子どものころ、メモを取り忘れて怒られたことが一度だけあります。小学校高学年の時、一人で留守番中に不思議な電話がかかってきました。「XXホテルの者ですが、△△さんのお宅ですか。△△さんがナガフチさんという方とお泊りの・・・」黒電話のそばのメモ用紙に私が書き留めたのは、父の浮気相手のナガフチさんという人の名字だけで、ホテルの名前は書かなかったのです。なぜ、誰が、何の目的でそんな電話をかけてきたのか、今考えれば謎です。ホテルの名も不明のまま、後で電話をかけ直すこともできなかったのだから、「そういう時はメモをとらなきゃいけない」と、私を後で叱った母の気持ちも、今ではわかります。

ある日、西島メカネ店近くの大きな病院で、脳波を見てもらいました。脳の手術をもらった後、1年たっても頭痛がとれなかったからです。お医者さんは、診察中、ポストイットにメモを一せ懸命とる私に言いました。——こんな患者さんは他にいない。脳波はきれいだけれど配りないから、温泉か<sup>ディズニーランド</sup>遊園地に行きなさい。もっとリラックスした方がいいという意味で文字通り、親身になって言ってくれたのでした。

すぐには受け入れ難かった脳神経内科医のアドバイスでしたが、数週間後、遊園地に本当に私は行きました。メモを一せ懸命取らない、リラックスした自分になるために！——しかし、壁に貼った私のメモ群が他人にとって遊園地みたいなものだったのなら、私の頭の中は、既に遊園地なんだろう？——ディズニーランドには、とても興味深いカフェがあります。壁一面に、アメリカの古い時代の芸人のエピソードや大型客船の写真などが飾ってある。大きなカフェです。

もしかしたら、「遊園地でメモを取る人などない」・・・あなたはどう思うでしょうか？

「ポストイット」まづ一つ買ってみませんか？  
脇山氏の番組で見た「エコミックス(マンガで読む経済の歴史)みず書房」も面白いなあ！  
ぜひ一読を！

